

〈研究ノート〉

宋・王質『詩総聞』に見える「旁紐」について

富平美波

南宋の王質は、その著『詩総聞』を世に残すことにより、『詩経』のほぼ全部の詩篇に関する自身の解釈を後世に伝えた。この書によって、我々は、『詩経』各詩篇ごとに、そこに用いられている字句のそれぞれにつき、その意味や発音に関する王質の見解をかなり細かく知ることができるのであるが、なかんずく「聞音」と表記された条では、詩篇中の多くの文字（特に押韻字）について、その発音が反切や直音により示されており、宋代の古音研究史を明らかにする上で、貴重な資料を提供していると言える。このような、『詩総聞』の音韻学史上の資料価値については、すでに中国の張民権氏がその大著『清代前期古音学研究』で指摘しておられ（同書p.20）、同書に含まれる大量の呉棫説の引用を利用して、すでに失われた呉の『詩補音』の（ほぼ）全貌を復元する著作（『呉棫〈詩補音〉与宋代古音学研究』を準備中であられると聞く（同じくp.8, p.17）。王質の生涯の事跡はあまり明らかではないが、『四庫提要』等に紹興三十年（1160）の進士であると見えており、呉棫（?～1152-1155の間）よりやや遅れ、朱熹（1130-1200）と相前後する時期の学者である。そして朱熹と同じく、呉棫の古音学を受け継ぎ、それを自身の思う方向へと利用・発展させた一人であったとすることができる。王質の古音学の全貌は、『詩総聞』に見える注音を全面的に分析しなければ明瞭にはならないが、本稿では、彼が「聞音」の条のなかで用いている「旁紐」という術語に注目し、その『詩総聞』中での使用例を、資料として集成することを企図した。

まず、「旁紐」表記のついた注音が見られる『詩経』の詩篇について、王質の叙述から彼が一連の押韻と見なしていることがわかる韻字を示し、かつそれぞれの「旁紐」に関わる叙述を全文引用したのが後記の【資料1】である。王質の説は、参考のため、朱熹『詩集伝』の音注および清の江有誥が認める押韻字と対照して掲げた。

王質の「旁紐」叙述を集成したからには、その「旁紐」の語の持つ意味についても、初歩的な考察をせずにはすむまいが、【資料1】の各例を一見して推定できるのは、それが韻字本来の音に声調の転換を施した音、或いはそのような音の転換を意味するということである。もっとも、『詩総聞』の中で、同様の性格を持つ注音のすべてが「旁紐」と注記されているのではなく、王質が解説のなかでこれは「旁紐」であると注明している例のみが、【資料1】に掲げられているわけである。そして「旁紐」の意味をそのように解釈して正しければ、その声調転換には、陰声

韻（母音で終わる韻）・陽声韻（鼻音韻尾で終わる韻）内部での平・上・去声間の転換に限らず、陰・入、陽・入にわたる転換も含まれる。その「声調」の転換の型ごとに押韻例を分類したのが後記の【資料2】である。なお、このような、元の音節と声母・韻母が同じで声調だけが異なる音節を、『文鏡秘府論』の「調四声図」や『四声五音九弄反紐図』では「旁紐」と呼ばず、「紐」或いは「正紐」と呼んでいて、王質の用語法は伝統的な「紐」関連の術語の用法に沿っていないようであるが、『詩総聞』での実例からは上記のように観察されるので、この点の疑問はひとまず置き、「旁紐」の用語の推移については、今後の研究課題としたい。

【資料2】によって各の韻字に付けられた王質の音注字を見てゆくと、もちろん中古音の細かい韻類が大幅に合流しているのに加え、声母の混同現象がある様子も観察できるが、これらの点については王質の注音全体にわたる調査が必要であるので、ひとまず置き、今、陰声韻と入声韻の対応関係のみに注目すると、

止撰開・蟹撰細音開　：　深撰入・曾撰三等開入（「邑」旁紐「倚」・「備」旁紐「逼」・「旨」旁紐「陟」・「適」旁紐「丁計切」「地」・「翁」旁紐「熙」）

仮撰二等開　：　咸撰入（「家」旁紐「甲」）

はともかくとして、

流撰　：　通撰入（「奏」旁紐「千木切」・「苟」旁紐「格」・「受」旁紐「叔」・「劉」旁紐「陸」）

流撰一等　：　梗撰二等開入（「苟」旁紐「格」）

效撰　：　宕撰唇音入（「保」旁紐「博」）

などの対応関係が目を引く。通撰の入声が流撰と相配となるのは、宋代の韻図では『四声等子』、下って元代の『経史正音切韻指南』がそうであり、宋代のものでも更に革新的な『皇極経世声音唱和図』や、元の『中原音韻』にも同じような相配状況が見られる。流撰については、そのほかに流撰一等「苟」が梗撰二等開「格」に転じるという「旁紐」が見られるが、『切韻指掌図』では、流撰の入声として一等に曾撰一等開、二等以下には臻撰が配されており、結果、流撰と止撰に同じ入声韻が置かれているが、同図で曾・梗撰がすでに合併していることを考えると、王質のこの例は、この『指掌図』と似た対応関係を示していると言える。また、效撰と宕撰入声（開）という対応も、『等子』・『指掌図』・『指南』、『唱和図』・『中原音韻』いずれにも見られることである。

なお、陽・入の対応関係の中には、

山撰（「間」）　：　咸撰入（「甲」）

のような例もあって、異種の入声韻尾が合流している様子が窺える。

このような、後世の発音からは理解しにくい『詩経』（ほか上古時期）の押韻例を解釈するのに、字音の声調の転換の存在を容認するというやり方は、同じく宋代の人である程迥が『古韻通

式』の中で述べているという有名な表現「四声互用、切響通用」を自然に思い起こさせる。おそらく、宋人の古韻通転説の一部をなす考えかたなのであろう。これについては、先に言及した張民権氏の『(呉越〈詩補音〉与宋代古音学研究』が、呉の『詩補音』の復元と合わせて、広く宋人の通転協音説の実態を解明することを志しているそうなので(『清代前期古音学研究』pp.25-26)、やがて同氏によって、王質の旁紐説も含め、つっこんだ考察がなされることであろう。

王質の「旁紐」法の利用のしかたを見ていくと、一般に押韻状況が解明しにくい(或いは「無韻」の詩篇が多い)とされる『詩経』の「頌」部分の詩篇について、この方法が多用されていることに気づく(「旁紐」注27例のうち、例(17)以下はすべて「頌」の詩篇に施された注音に係る)。その結果認められている押韻は、特に陰・入、陽・入の異類にまたがる「旁紐」を含む例の場合、江有誥はもとより、朱熹によっても認められていないものが多く、解釈としてはかなりの無理があると言わざるを得ない。

王質説に従うと、陰声韻の音を「旁紐」によって入声に転換したものと、陽声韻の音を「旁紐」によって入声に転換したものが合わさって一連の押韻を形作る詩篇もある。(14)256「抑」6章・(22)285「武」・(25)294「桓」の押韻例がそうで、従ってこれらの例は下の【資料2】ではそれぞれ2カ所に現れている。これらはいずれも江・朱ともに押韻とは認めておらず、うち(22)と(25)はやはり「頌」に属する詩篇である。

更に、【資料1】に挙げた注音例の中には、本来の字音から声調を変化させるにとどまらず、同義の異字の字形から新しい字音を推定するようなもってまわった音操作の例も見られる。(24)287「訪落」の押韻例がそうで、「身」字の字音として、『説文解字』で「身」と互訓の関係にある「躬」がまた「躬」にも作られることから(『説文解字』八篇上身部「身、躬也」、七篇下呂部「躬、身也。……。躬、躬或从弓」)、「身」に「呂」の「旁紐」たる「廬」の音を想定し、「家」字(仮開二平麻見 古牙切 魚部)が「身」字(臻開三平真書 失人切 真部)と押韻するという特殊な押韻例を可能にしている。「躬」(「躬」)は『広韻』では「居戎切」(通合三平東見 冬部)の音であるが、「呂」(遇開三上語来 力拳切 魚部)が『説文』で同部首で類義字であることに加え、やはり類義の「躬」字の音(遇合三平虞溪 豈俱切 侯部)をも参照してのことであろう。「呂」が声符としても働きうると解釈しているものと思われる。また、これほど特殊ではないが、(6)166「天保」の例などは、「福」の古音を直接に「逼」とせず、「福者備也」という『礼記』「祭統」の声訓を介して、「福」(通合三入屋幫 方六切 職部)→「備」(止開三去至並 平秘切 職部)→「旁紐」「逼」(曾開三入職幫 彼側切 職部)という音の連鎖を作り出している。王質にとって、異声調間の音転のほうが、異なる韻母どうしの転換よりも起こりうる現象として想定しやすかったのかもしれないが、これなども間接的な例の1つである。この2例のうち、(24)287「訪落」の例は、江有誥も朱熹も押韻とは認めておらず、やはり「頌」に属する詩篇の1つである。

先に挙げた張民権氏の『清代前期古音学研究』は、明の陳第の研究が同時期の人々に重視されなかった原因の1つとして、陳第の理論では古詩に登場する煩瑣で複雑な合韻・借韻現象を解釈することが不可能であったという点を指摘している（同書pp.35-36）。初期の古韻研究は、『詩経』学者による、とにかく『詩経』のすべての部分を（その時点においてかなう限り正しく）読み上げてしまいたいという情熱に支えられた部分があって、王質のアクロバティックな「旁紐」も、そのような方向で発揮されたものであろうか、と想像することもできるのである。

【資料1】

この資料では、『詩総聞』の「聞音」の条において「旁紐」表記のある注音が示されている『詩経』の篇章につき、王質が一連の押韻と認めている韻字をすべて掲げ、『詩経』の篇章が異なるごとにかっこ付きで等し番号を付けた。『詩経』の詩篇名の前の数字は、その詩篇が『詩経』の何番目の詩であるかを示したものである。

冒頭に（王）と注して示したのが王質の認める押韻字である。同じ行に配列した韻字がすべて、互いに押韻していると認められているものであり、換韻がある部分では、行かえを行った。また、同じ箇所について2通りの可能性が認められている場合は、次の行に「あるいは」と付記して異なる解釈を示した。その場合「呉氏」の注記があるのは、王質によって「呉氏」（おそらく呉棫）の説が引用されているものである。なお、王質が明確に述べているわけではないが、一連の押韻字に含まれると認められている可能性がある字はかっこに入れて補った。各韻字の右に小さい数字で示したのは、その字の現れる句数である。たとえば「美3」は、韻字「美」が第3句目の句末字であることを示す。句中字が押韻している場合は、たとえば「尽10-3」のように示した。この場合「尽」は第10句の第3字目の字であることを表す。「旁紐」に関わる注音には下線を付し、末尾にそれが現れる「聞音」中の叙述を引用した。ただし、この「旁紐」にかかわる注音は、文章中での表現がどのようなものであるに関わらず、押韻字を表示した部分では、それが直音で示されていれば、一律に「音某」として示した。

王質の説の特徴を明らかにする一助として、王質説のほかに、清朝小学が『詩経』の押韻研究に関して完成期に達した段階の代表的成果として、江有誥の『詩経韻読』を選び、それが各篇章について認めている押韻字と韻部を（江）として掲げた。さらに、王質とほぼ同時代の、同じく呉棫の影響を受けている代表的な研究成果として朱熹の『詩集伝』を選び、その中から押韻に関連する文字について付されている音注のみを抽出して（朱）の表示の下に掲げた。どちらも王質説の前に掲示した。なお、両者の表示において、各韻字の次の数字は、（王）の場合と同じく句数・字数を示すものであるが、江・朱・王で互いに句の区切り目が異なる場合があり、その場合は、同一の韻字に注した句数・字数が一致していない。

(1) 42「静女」3章

(江) 萇1 美3 脂部

異2 貽4 (去声) 之部

(朱) 萇1 (徒兮徒計二反) 異2 (夷曳二音) 貽4 (与異同)

(王) 萇1 異2 (盈之切) (貽4?)

あるいは「吳氏」(異2) 貽4 (以志切)

「聞音曰、異盈之切、叶萇。吳氏貽作以志切、旁紐皆可叶。然作平声誦意多。」

(2) 79「清人」3章

(江) 軸1 (平声) 陶2 (徒愁反) 抽3 好4 (呼愁反) 幽部

(朱) 軸1 (叶音冑) 陶2 (徒報反 叶徒候反) 抽3 (叶勅救反) 好4 (呼報反 叶許候反)

(王) 陶2 (徒報切) 好4 (呼報切)

あるいは (陶2?) 抽3 (土刀切) 好4 (蒿)

「孫氏抽土刀切、本招借用作抽、招亦抽也、審爾、則好旁紐作蒿為正。但軸字未詳、所以不能如前二章也。」

(3) 119「杕杜」2章

(江) 菁2 叢3 (文選注引作瑩瑩、当从之。) 姓5 (平声) 耕部

比7-3 飲9-3 脂部

(朱) 菁2 (子零反) 叢3 (求蚩反) 姓5 (叶桑經反)

(王) 菁2 叢3 姓5 (桑經切) か。

「姓桑經切、古姓誦如星、蓋用旁紐。」

(4) 128「小戎」2章

(江) 阜1 手2 幽部

中3 驂4 (粗森反) 中侵合韻 ○ 中十六侵十八故得合用

合5 (胡急反) 軌6 (奴急反) 邑8 緝部

期9 之10 之部

(朱) 阜1 (扶有反) 中3 (叶諸仍反) 驂4 (疏簪反) 軌6 (音納) 邑8 (叶烏合反)

(王) 阜1 (符有切) 手2 か。

中3 (諸仍切 劉氏関中以中為蒸。) 驂4 (疏簪切) か。

合5 軌6 か。

子7 邑8 (音倚)

「邑旁紐作倚、叶子。」

(5) 162 「四牡」 5章

(江) 駮2 諗5 (平声) 三句一韻、侵部

(朱) 駮2 (侵寢二音) 諗5 (深審二音)

(王) 駮2 諗5 (氏任切)

「諗式荏切、旁紐作氏任切、叶駮。」

(6) 166 「天保」 5章

(江) 福2 (方逼反) 食4 德6 (丁力反) 之部

(朱) 弔1-3 (都歷反) 福2 (叶筆力反)

(王) 福2 (筆力切) 食4 德6 か。

「福筆力切。礼、福者備也。備旁紐作逼。古文福字多叶直極等字、至唐猶然。古者不独以福字作逼字音、亦以福作逼字用、賈氏疏者或制大權以福天子、顏氏福古逼字、自後福作祐意、不作逼、然逼音猶在也。」

(7) 179 「車攻」 6章

(江) 駕1 (音過) 猗2 (阿去声) 馳3 (音它) 破4 歌部

(朱) 猗2 (於寄於箇二反) 馳3 (叶徒臥反) 破4 (彼寄普過二反)

(王) 駕1 (『集韻』居牙切→音訛か?) 馳3 (唐何切) 破4 (蒲禾切、音坡)

あるいは 「呉氏」 駕1 (読作訛) 馳3 (読作馳) 破4 (読作坡)

あるいは 「呉氏」 猗2 (倚可切) 破4

あるいは 『集韻』 猗2 (於寄切) 破4 (披義切)

「駕、集韻亦在家部、居牙切。馳、集韻亦在馳部、唐何切。破亦当在坡部、蒲禾切。説文疲波坡頗跛皆以皮得声。皮当作蒲禾、左氏牛則有皮、犀兕尚多、棄甲則那、又從其有皮、丹漆若何。破則坡音、不惟旁紐当然、古音亦爾。古加禾兩韻多通用、如明唐兩韻亦通用。……。」

(8) 201 「谷風」 3章

(江) 嵬2 (音危) 萎4 怨6 (叶音威) 脂元合韻

(朱) 嵬2 (五回反) 萎4 (叶於回反) 怨6 (叶韻未詳)

(王) 德5 怨6 (音德) あるいは 音越

「怨読作德、西北人相怨恨之声。此字以声取。旁紐作越、亦可叶德。」

(9) 203 「大東」 4 章

(江) 子1 子3 子5 子7 四子字為韻

來2 (音吏) 服4 (扶備反) 裘6 (音忌) 試8 之部

(朱) 來2 (音賚、叶六直反) 服4 (叶蒲北反) 裘6 (叶渠之反) 試8 (叶申之反)

(王) (來2?) 服4 (蒲北切)

裘6 (渠之切) 試8 (申之切)

「試申之切、旁紐則然。易可貞無咎、固有之也、無妄之藥、不可試也。」

(10) 209 「楚茨」 6 章

(江) 具1-2 (渠昼反) 奏1-4 祿2 (去声) 侯部

將3 慶4 (音羌) 陽部

飽5 首6 考8 (苦叟反) 幽部

盡10-3 引12-3 真部

(朱) 奏1 (叶音族) 慶4 (叶祛羊反) 飽5 (叶補苟反) 考8 (叶去九反) 盡10 (叶子忍反)

(王) 奏1 (臧後切→千木切) 祿2

(將3?) 慶4 (墟羊切)

包 (飽5の誤りか?) (補擲切) (首6?) 考8 (去久切)

盡10-3 (子忍切) 引12-3 (一忍切)

「奏臧後切、旁紐千木切、叶祿。」

(11) 220 「賓之初筵」 1 章

(江) 楚3 (三句起韻) 旅4 魚部

旨5 偕6 (音几) 脂部

設7 (叶音失) 逸8 脂祭通韻

抗9 (平声) 張10 陽部

同11 功12 東部

的13 (貂入声) 爵14 宵部

(朱) 秩2 (無韻、未詳。後三四章放此。) 偕6 (音皆、叶拳里反) 設7 (叶書質反)

抗9 (叶居郎反) 的13 (叶丁藥反)

(王) (秩2?) 旨5 (音陟) (設7?) (書質切) 逸8

抗9 (居郎切) (張10?)

的13 (丁藥切) (爵14?)

「旨旁紐作陟叶逸。」

(12) 220 「賓之初筵」 2章

(江) 舞1-2 鼓1-4 祖3 魚部

礼4 至5 (上声) 脂部

壬6-2 林6-4 湛8 (都森反) 侵部

能10 (奴吏反) 又12 (音異) 時14 (去声) 之部

(朱) 奏2 (叶宗五反) 湛8 (都南反、叶持林反) 能10 (叶奴金反) 仇11 (音拘、叶求其二音) 又12 (叶由怡二音) 時14 (叶酬時二音)

(王) (壬6-2?) (林6-4?) 湛8 (持林切)

仇11 又12 (音尤)

康13-3 (音恪) 爵13-4

爾14-3 (音而) 時14-4

「仇又相叶、又旁紐作尤。康旁紐作入声作恪、叶爵。爾旁紐平声作而、叶時。此随句取叶也。大率不叶者委曲取叶、亦無有不叶者。」

(13) 225 「都人士」 5章

(江) 餘2 旃4 盱6-3 魚部

(朱) 盱6-3 (喜俱反)

(王) 旃4 盱6-3

あるいは 兮5-4 矣6-4 (平声)

「盱叶旃、不用矣。若用矣、旁紐作平声叶兮。」

(14) 256 「抑」 6章

(江) 舌3 (三句起韻。) 逝4-4 (時折反) 祭部

讐5 (去声) 報6 (布瘦反) 幽部

友7 (音以) 子8 之部

繩9 承10 蒸部

(朱) 「無易…1…苟矣2」 (此二句不用韻。) 逝4 (叶音折、与舌叶。) 讐5 (叶市又反)

報6 (叶蒲救反) 友7 (叶羽己反) 子8 (叶獎履反)

(王) 言1 (音孿) 苟2-3 (音恪) 舌3 (食列切) 逝4-4 (食列切)

あるいは 矣2-4 矣4-5

讐5 (市又切) 報6 (敷救切)

友7 (羽軌切) 子8 (獎礼切)

「言旁紐作擘、苟旁紐作格、集韻舌逝皆食列切、四字無不叶也。以矣相叶亦可。然吳氏以為未詳、非也。」

(15) 257 「桑柔」 2 章

(江) 駢1 (与夷黎哀協。) 夷3 黎5 哀7 (音衣) 脂部

翩2 (音繽) 泯4 (平声) 燼6 (平声、說文作表、燼乃俗字。) 頻8 真部

(朱) 翩2 (叶批賓反) 泯4 (叶彌隣反) 燼6 (叶咨辛反) 哀7 (叶音依)

(王) 燼6 (音辛) 頻8

「燼旁紐作辛、叶頻。」

(16) 264 「瞻卬」 2 章

(江) 田1 (徒人反、与人協。) 人3 真部

有2-3 (与収協。) 収6-3 (上声) 之幽通韻

奪4-3 (徒厥反、与說協。) 說8-3 (如字) 祭部

罪5 (与罪協) 罪7 脂部

(朱) 有2-3 (酉由二音) 奪4-3 (徒活反) 収6-3 (殖酉殖由二反) 說8-3 (音脱)

(王) 有2-3 収6-3 (音受)

奪4-3 說8-3 (音脱)

「聞音曰、說、王氏引此詩作脱、叶奪。如此則収旁紐作受、叶有。兩上叶、兩下叶、皆隔句叶也。」

(17) 269 「烈文」

(江) 公1 (叶音光) 疆3 邦5 崇6-4 (叶音牀) 功7 (叶音光) 皇8-4 陽東中合韻

○ 陽十四東十五中十六故得合用

人9 訓10-4 (平声) 刑12-4 文真耕合韻

王13-4 忘13-6 陽部

(朱) (押韻に関する音注なし。)

(王) 公1 邦5 (卜工切) 崇6-4

疆3 (音驕) 保4-3 (音博)

功7 皇8-4 (胡公切)

人9 訓10-4 (音薰)

徳11-4 刑12-4 (音檄)

之4-4 之6-5 之8-5 之10-5 之12-5

「聞音曰、首尾皆以之相叶。疆旁紐躋、保旁紐博、相叶。……、訓旁紐薰叶人。刑旁紐檄叶徳。」

(18) 270 「天作」

(江) 荒2-3 康4-3 行6 (音杭) 陽部

(朱) 行6 (叶戸郎反)

(王) 荒2-3 康4-3 行6 (戸郎切)

矣3-3 (魚其切) 矣5-3 (魚其切) 之7-4 か。

作3-2 (音倣) 徂5-2 (音祖) (あるいは「咀」で音胥か) 保7-3 (音補) か。

「聞音曰、上句叶荒康行是也。行戸郎切。下句叶矣之是也。矣魚其切。細推皆叶。韓氏岐山操、岐有咀、我往独処、正用此詩。以徂為咀、当有所自来。旁紐亦近、胥祖兩韻仍通用。作為倣、保為補、皆叶。今西北人猶有此音。」

(19) 271 「昊天有成命」

(江) (無韻)

(朱) (押韻に関する音注なし。)

(王) 之2-4 之8-4 か。

基4-3 熙6-3

心7-3 靖8-3 (子盈切)

「靖旁紐子盈切、叶心。」

(20) 272 「我将」

(江) 牛2 (音疑) 右3-4 (音怡) 之部

方5 王6 饗7-3 (平声) 陽部

8～10句 無韻

(朱) 右3-4 (叶音由) 享7-3 (叶虚良反)

(王) 牛2 (魚其切) 之3-5

あるいは 牛2 右3-4 (夷周切)

刑4 方6 (披耕切)

王7 饗8-3 (虚良切)

威10 之11-4

あるいは

「呉氏」之3-5 之7-4 之10-4 か。

「聞音曰、牛魚其切、与之叶。末威与之叶、相似。不爾、用右旁紐夷周切、叶牛。方披耕切、叶刑。饗旁紐虚良切、叶王。呉氏三之為韻亦可。」

(21) 279 「豊年」

(江) 黍1-4 稌1-6 魚部

秭3 醴4 妣5 礼6 皆7 (音几) 脂部

(朱) 稌1 (音杜) 廩2 (力錦反) 秭3 (咨履反) 皆7 (叶拳里反)

(王) 年1 (彌因切) 廩4 (音臨)

黍2 稌3

秭5 醴6 妣7 礼8 皆9 (拳里切)

「聞音曰、年彌因切、廩旁紐作臨、上下相叶。」

(22) 285 「武」

(江) (無韻)

(朱) (押韻に関する音注なし。)

(王) 王1-4 王3-4

受5-3 (音叔) 劉6 (音陸) 功7 (音谷)

「聞音曰、二王相叶。受旁紐叔、劉旁紐陸、功旁紐谷、皆相叶。」

(23) 286 「閔予小子」

(江) 造2 (徂瘦反) 疾3 考4 (苦叟反) 孝5 (呼瘦反) 之幽通韻

庭7-3 敬9-3 (平声) 耕部

王10 忘11 陽部

(朱) 造2 (叶徂候反) 疾3 (音救) 考4 (叶祛候反) 孝5 (叶呼候反) 庭7-3 (叶去声)

(王) 庭7-3 (他定切) 敬9-3

あるいは 止7-4 止9-4

「聞音曰、中以止相叶、或用止上一字叶、庭他定切、旁紐叶敬。」

(24) 287 「訪落」

(江) 止1 (叶音帚) 考2 之幽通韻

艾4 (擊去声) 渙6 (音喙) 難8 (奴練反) 祭元通韻

下9 (音戸) 家10 (音古)

11～12句 無韻

(朱) 艾4 (五蓋反) 難8 (乃旦反)

(王) 止1-4 艾4-4 (魚刈切)

家10 (古胡切) 身12 (音廬、あるいは、音区。)

〔聞音曰、艾魚刈切、叶止。家古胡切。説文、身躬也、躬身也、從呂。旁紐廬、可以廬取声。説文、軀体也。広韻体身也。從区。亦可以区取声。叶家、家讀作孤。〕

(25) 294 「桓」

(江) 1～2句 無韻

王4 方6 陽部

7～9句 無韻

(朱) (押韻に関する音注なし。)

(王) 邦1 (補耕切) 年2 (彌因切)

家7 (音甲) 間9-3 (音甲)

あるいは 天8 間9-3 (=閑 音賢)

〔……、家旁紐作甲、間旁紐作甲、可叶。又天間一叶、別出。〕

(26) 296 「般」

(江) (無韻)

(朱) 翁4-3 (許及反) (あるいは押韻に関する音注なし?)

(王) 高2-3 喬3-3

時1-3 翁4-3 (音熙) 之5-3 之6-3 之7-3

〔聞音曰、此詩叶音、皆在末語上一字。恐是其音如此、通称三字、単称一字。於皇時者周也。陟其高者山也。隴山喬者嶽也。允猶翁者河也。高与喬叶。翁旁紐作熙、熙与前時後之叶。敷天之者、下也。衰時之者、対也。時周之者、命也。以之相叶。古人皆不徒然、雖其音不可得而聞、然搜辞尋音、未至于害義悖理、特好古之過爾。〕

(27) 305 「殷武」 3章

(江) 辟1 績2 辟3 適4 (如字) 解5 (音擊) 支部

(朱) 辟1 (音璧) 適4 (直革反) 解5 (音懈、叶訖力反)

(王) 適4 (丁計切、音地) 解5 (古義切、音係)

〔……、解古義切、音係。適丁歷切、音的、旁紐作丁計切、音地、叶係。……〕

【資料2】

この資料では、王質が「旁紐」に関わる注音を付している押韻例について、押韻字と認められている（或いは認められている可能性のある）字とその注音が中古音においてどのような音類に相当するかを示したものである。『詩経』の韻字の音については、向熹『《詩経》古今音手冊』に拠り、ところどころ王質自身の音注や義注によって修正を施した。他の文字については、主として郭錫良『漢字古音手冊』に拠ったほか、『広韻』・『集韻』等を参考にした。付記した反切は特に注記がない限り『広韻』のものである。また、王質の認める押韻字と、王質が付した直音注（およびそれに準ずるもの）の文字には上古音における所属韻部を付記したが、工具書の関係上、王力説に従っているので、【資料1】で参照した江有誥の分部と異なっている。各例の前のかっこに入った数字は、上の【資料1】のものと同じ。

「旁紐」が陰声平上去声間の声調転換にかかわるもの

(1) 42静女3章 「貽」：旁紐「以志切」（「呉氏」説）

異（止開三去志以 羊吏切 職部）

貽（止開三平之以 与之切 之部） 以志切（止開三去志以）

(2) 79清人3章 「好」：旁紐「蒿」

抽（流開三平尤徹 丑鳩切 幽部）「土刀切」（效開一平豪透）

好（效開一上皓曉 呼皓切 幽部）あるいは「呼報切」（效開一去号曉） 蒿（效開一平豪 曉 呼毛切 宵部）

(7) 160車攻6章 「破」：旁紐「蒲禾切」「坡」

駕（仮開二去禡見 古訝切 歌部） 居牙切（仮開二平麻見）

馳（止開三平支澄 直離切 歌部） 唐何切（果開一平歌定）

破（果合一去過滂 普過切 歌部） 蒲禾切（果合一平戈並） 坡（果合一平戈滂 滂禾切 歌部）

あるいは（「呉氏」説）

駕（仮開二去禡見 古訝切 歌部） 訛（果合一平戈疑 五禾切 歌部）

馳（止開三平支澄 直離切 歌部） 駝（果開一平歌定 徒河切 歌部）

破（果合一去過滂 普過切 歌部） 坡（果合一平戈滂 滂禾切 歌部）

(9) 203大東4章 「試」：旁紐「申之切」

裘（流開三平尤群 巨鳩切 之部） 渠之切（止開三平之群）

試（止開三去志書 式吏切 職部） 申之切（止開三平之書）

(12) 220賓之初筵2章 「又」：旁紐「尤」

仇（流開三平尤群 巨鳩切 幽部）

- 又（流開三去宥云 于救切 之部） 尤（流開三平尤云 羽求切 之部）
- (12) 220賓之初筵 2 章 「爾」：旁紐「而」
- 爾（止開三上紙日 兕氏切 脂部） 而（止開三平之日 如之切 之部）
- 時（止開三平之禪 市之切 之部）
- (13) 225都人士 5 章 「矣」：旁紐「平声」
- 兮（蟹開四平齊匣 胡鷄切 支部）
- 矣（止開三上止云 于紀切 之部） 平声（止開三平之云）
- (16) 265瞻卬 2 章 「収」：旁紐「受」
- 有（流開三上有云 云久切 之部）
- 収（流開三平尤書 式州切 幽部） 受（流開三上有禪 殖酉切 幽部）
- (18) 270天作 「徂」：旁紐「祖」 「岨」：旁紐「胥」
- 作（宕開一入鐸精 則落切 鐸部） 倣（『字彙』子賀切：果開一去箇精；『集韻』「作」遇合一上姥精 摠古切）
- 徂（遇合一平模從 昨胡切 魚部） 祖（遇合一上姥精 則古切 魚部）
- 或いは 岨（遇開三平魚清 七余切 魚部） 胥（遇開三上語心 私呂切 又平聲 魚部）
- 保（效開一上皓幫 博抱切 幽部） 補（遇合一上姥幫 博古切 魚部）
- (20) 272我將 「右」：旁紐「夷周切」
- 牛（流開三平尤疑 語求切 之部）
- 右（流開三去宥云 于救切 之部） 夷周切（流開三平尤以）
- (24) 287訪落 「呂」：旁紐「廬」
- 家（仮開二平麻見 古牙切 魚部） 古胡切（遇合一平模見）
- 身（臻開三平真書 失人切 真部）
- 「從呂」（遇開三上語来 力拳切 魚部） 廬（遇開三平魚来 力居切 魚部）

「旁紐」が陽声平上去間の声調転換にかかわるもの

- (3) 119杕杜 2 章 「姓」：旁紐「桑經切」「星」
- 菁（梗開三平清精 子盈切 耕部）
- 𦉳（梗合三平清群 渠營切 耕部）
- 姓（梗開三去勁心 息正切 耕部） 桑經切（梗開四平青心） 星（梗開四平青心 桑經切 耕部）
- (5) 162四牡 5 章 「諗」：旁紐「氏任切」
- 駮（深開三平侵清 七林切 侵部）
- 諗（深開三上寢書 式荏切 侵部） 氏任切（深開三平侵禪）

(15) 257桑柔2章 「燼」：旁紐「辛」

燼（臻開三去震邪 徐刃切 真部） 辛（臻開三平真心 息鄰切 真部）

頻（臻開三平真並 符真切 真部）

(17) 269烈文 「訓」：旁紐「薰」

人（臻開三平真日 如鄰切 真部）

訓（臻合三去問曉 許運切 文部） 薰（臻合三平文曉 許云切 文部）

(19) 271昊天有成命 「靖」：旁紐「子盈切」

心（深開三平侵心 息林切 侵部）

靖（梗開三上靜從 疾郢切 耕部） 子盈切（梗開三平清精）

(20) 272我將 「饗」：旁紐「虛良切」

王（宕合三平陽云 雨方切 陽部）

饗（宕開三上養曉 許兩切 陽部） 虛良切（宕開三平陽曉）

(21) 279豐年 「廩」：旁紐「臨」

年（山開四平先泥 奴顛切 真部） 彌因切（臻開三平真明）

廩（深開三上寢來 力稔切 侵部） 臨（深開三平侵來 力尋切 侵部）

(23) 286閔予小子 「庭」：旁紐「他定切」

庭（梗開四平青定 特丁切 耕部） 他定切（梗開四去徑透）

敬（梗開三去映見 居慶切 耕部）

「旁紐」が陰入間の轉換にかかわるもの

(4) 128小戎2章 「邑」：旁紐「倚」

子（止開三上止精 即里切 之部）

邑（深開三入緝影 於汲切 緝部） 倚（止開三上紙影 於綺切 歌部）

(6) 166天保5章 「備」：旁紐「筆力切」「逼」

福（通合三入屋幫 方六切 職部）

「備也」（止開三居至並 平秘切 職部） 筆力切（曾開三入職幫） 逼（曾開三入職幫 彼側切 職部）

食（曾開三入職船 乘力切 職部）

德（曾開一入德端 多則切 職部）

(10) 209楚茨6章 「奏」：旁紐「千木切」

奏（流開一去候精 則候切 屋部）「臧後切」（流開一上厚精） 千木切（通合一入屋清）

祿（通合一入屋來 盧谷切 屋部）

(11) 220賓之初筵1章 「旨」：旁紐「陟」

- 秩（臻開三入質澄 直一切 質部）
 旨（止開三上旨章 職雉切 脂部） 陟（曾開三入職知 竹力切 職部）
 設（山開三入薛書 識列切 月部） 書質切（臻開三入質書）
 逸（臻開三入質以 夷質切 質部）
- (14) 256抑6章 「苟」：旁紐「格」
 言（山開三平元疑 語軒切 寒部） 擎（山開三入薛疑 魚列切 月部）
 苟（流開一上厚見 古厚切 侯部） 格（梗開二入陌見 古伯切 鐸部）
 舌（山開三入薛船 食列切 月部） 食列切（山開三入薛船）
 逝（蟹開三去祭禪 時制切 月部） 食列切（山開三入薛船）
- (17) 269烈文 「保」：旁紐「博」
 疆（宕開三平陽見 居良切 陽部） 躑（宕開三入藥見 居勺切 又群母 其虐切 藥部）
 保（效開一上皓幫 博抱切 幽部） 博（宕開一入鐸幫 補各切 鐸部）
- (22) 285武 「受」：旁紐「叔」
 (22) 285武 「劉」：旁紐「陸」
 受（流開三上有禪 殖酉切 幽部） 叔（通合三入屋書 式竹切 覺部）
 劉（流開三平尤來 力求切 幽部） 陸（通合三入屋來 力竹切 覺部）
 功（通合一平東見 古紅切 東部） 谷（通合一入屋見 古祿切 屋部）
- (25) 294桓 「家」：旁紐「甲」
 家（仮開二平麻見 古牙切 魚部） 甲（咸開二入狎見 古狎切 葉部）
 間（山開二平山見 古閑切 又去声 寒部） 甲（咸開二入狎見 古狎切 葉部）
- (26) 296般 「翕」：旁紐「熙」
 時（止開三平之禪 市之切 之部）
 翕（深開三入緝曉 許及切 緝部） 熙（止開三平之曉 許其切 之部）
 之（止開三平之章 止而切 之部）
 之（同上）
 之（同上）
- (27) 305殷武 「適」：旁紐「丁計切」「地」
 適（梗開四入錫端 都歷切 錫部）「丁歷切」（梗開四入錫端）「音的」（梗開四入錫端 都
 歷切 藥部） 丁計切（蟹開四去霽端）地（止開三去至定 徒四切 歌部）
 解（蟹開二去卦見 古隘切 錫部） 古義切（止開三去寘見）係（蟹開四去霽見 古詣切
 錫部）

「旁紐」が陽入間の転換にかかわるもの

(8) 201谷風3章 「怨」：旁紐「越」

德（曾開一入德端 多則切 職部）

怨（山合三去願影 於願切 寒部） 越（山合三入月云 王伐切 月部）

(12) 220賓之初筵2章 「康」：旁紐「恪」

康（宕開一平唐溪 苦岡切 陽部） 恪（宕開一入鐸溪 苦各切 鐸部）

爵（宕開三入藥精 即略切 藥部）

(14) 256抑6章 「言」：旁紐「擊」

言（山開三平元疑 語軒切 寒部） 擊（山開三入薛疑 魚列切 月部）

苟（流開一上厚見 古厚切 侯部） 格（梗開二入陌見 古伯切 鐸部）

舌（山開三入薛船 食列切 月部） 食列切（山開三入薛船）

逝（蟹開三去祭禪 時制切 月部） 食列切（山開三入薛船）

(17) 269烈文 「疆」：旁紐「躄」

疆（宕開三平陽見 居良切 陽部） 躄（宕開三入藥見 居勺切 又群母 其虐切 藥部）

保（效開一上皓幫 博抱切 幽部） 博（宕開一入鐸幫 補各切 鐸部）

(17) 269烈文 「刑」：旁紐「檄」

德（曾開一入德端 多則切 職部）

刑（梗開四平青匣 戶經切 耕部） 檄（梗開四入錫匣 胡狄切 藥部）

(22) 285武 「功」：旁紐「谷」

受（流開三上有禪 殖酉切 幽部） 叔（通合三入屋書 式竹切 覺部）

劉（流開三平尤來 力求切 幽部） 陸（通合三入屋來 力竹切 覺部）

功（通合一平東見 古紅切 東部） 谷（通合一入屋見 古祿切 屋部）

(25) 294桓 「間」：旁紐「甲」

家（假開二平麻見 古牙切 魚部） 甲（咸開二入狎見 古狎切 葉部）

間（山開二平山見 古閑切 又去声 寒部） 甲（咸開二入狎見 古狎切 葉部）

引用・参考文献一覽

王質『詩總聞』（叢書集選418 1984新文豐出版社）

王質『詩總聞』（百部叢書集成 經苑 所収）

朱熹『詩集傳』（1987 中華書局香港分局）

江有誥『詩經韻讀』（音韻學叢書所収 1966廣文書局）

向熹『《詩經》古今音手冊』（1988南開大學出版社）

郭錫良『漢字古音手冊』（1986北京大學出版社）

『說文解字 附檢字』（1979中華書局）

- 『校正宋本廣韻』(1986芸文印書館)
- 『宋刻集韻』(1989中華書局)
- 『等韻五種』(1996芸文印書館)
- 『文鏡秘府論』(1975人民文學出版社)
- 張民權『清代前期古音學研究』(2002北京廣播學院出版社)
- 陳新雄『古音研究』(1999五南圖書出版公司)
- 小西甚一『文鏡秘府論考 研究篇上』(1948大八洲出版)
- 喻世長「從邵康節至周挺齋 — 漢語宋金元北方話入聲演變的一條線索」(『中原音韻新論』1991
北京大學出版社 pp.187-197)
- 周祖謨「宋代汴洛語音考」(『問學集』 1966中華書局 下冊pp.581-655)
- 李文泯『宋代語言研究』(2001線裝書局)